



事実のサイズ

事実は、扱い方でしか大きくならない。

出来事そのものは、
常に一定のサイズでしか存在しない。

だが、それに触れる人間の重心によって、
その場の現実とは別の大きさとして立ち上がる。

問題は、何が起きたかではない。
それを、どの高さで扱うかだ。

それは、重大な問題が起きているからではない。
取り返しがつかないからでもない。

多くは、
調整できる範囲にあり、
処理可能な領域にあり、
構造としては閉じている。

それにもかかわらず、
出来事が膨らんで見えるとき、

起きているのは事実の変化ではない。
扱い手の位置の崩れである。

強い語調、過剰な速度、緊張した空気。

それらはすべて、
事実の外側に付着する増幅装置である。

反応が輪郭を歪め、
空気が意味を上書きする。

人はやがて、
出来事そのものではなく、
「大きく見える現象」に反応し始める。

だが、事実は変わっていない。

変わっているのは、
それを扱う側の重心と、距離の取り方だけだ。

事実をそのままのサイズで扱える人間は、
場の膨張に加担しない。

それは冷静さではなく、
位置が崩れていないということだ。

声を荒げないのは抑制ではない。
小さく扱うのは軽視でもない。

ただ、過剰な意味づけを拒否している。

その結果として、
場は必要以上に大きくなり、

何が起きているのかだけが、
静かに残る。

事実を拡張しない人間が、
場の大きさを決めている。



Edition — 存在の芯
別景：事実のサイズ

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026